小田高蹴球部夏の思い出

嶋村謙三

昭和27年4月から昭和29年正月までお世話になった蹴球部。（どうもサッカー部では思い出も浮かんできません）

天からバケツの水が

私の心の中で「蹴球部」の思い出は合宿です。私は部の中で身体能力が一番劣っていた。皆が楽々出来るストレッチもアップの段階から全力投球ですから、夏の合宿では、何度バケツの水に世話になったことか。当時は、練習中に水分補給は厳禁でしたので、グランド上に倒れた自分の頭に、天からバケツの水が口から喉へ、その水の甘露の味は、今思い出しても懐かしく思います。

当時の部員数は20数名でしたが、それと同数以上の先輩方がお見えでしたので、練習もマンツーマンに近い形でしごかれたものです。

苦しかったピンチキック

一番苦しかったのは、練習時間の最後のピンチキックです。左右真ん中と容赦なく飛んでくるボールに走り込んでは蹴り込み、又走る・蹴るの繰り返し。「ヨーシ」の声が掛かるとグランドに座り込む日々です。

楽しかった食事

合宿の楽しみは何といっても3度の食事です。メニューは、朝食は味噌汁と納豆か生卵、昼食は揚げ物（精進揚げ・トンカツ等）夕食は豚汁かカレー。これを戦争中に海軍で使用していた金物の食器で、ワイワイ食べたものです。

書き始めると、40年前の合宿の練習メニュー、コーチの先輩達の怒鳴り声さえも頭に浮かんできます。苦しい苦しい10日間の合宿・日々の練習と鍛え上げられた「小田高蹴球部」が負けるわけがないと自負していました。結果、県下では無敵を誇り、国体・全国大会両方に出場できました。

自分としても、以後の社会生活の上でどんなに苦境に立たされても、あの苦しい合宿に耐えた根性で乗り切ることが出来ました。

「小田高蹴球部」ありがとう。

合宿の思い出

田中伸二

「負けてたまるか」

本当に苦しい合宿であった。あれは2年生（S 27年）の夏。先輩のご努力で、当時学生ナンバー1の早稲田から、伯井、官崎、青木の3氏がコーチとして来てくれた。雨が降らず埃だらけの炎天下のグランドで倒れるまで走らせられた。この合宿でみんな、歯をくいしばって頑張った。それ以後の試合は、延長になれば「勝った！」と思った。みんなあれだけ苦しい練習をしたのだから「負けてたまるか」と頑張った。

その頑張りのお陰で、関東無敗のチームとなった。お陰で3年生では連戦連勝で、我が母校、唯一の記録である、国体、全国両大会に出場する事が出来た。

社会人になってから「負けてたまるか」の精神は、随所で発揮され、60を越えるまで挫折する事は無かった。現役の時あの様な、貴重な機会を与えて頂いた諸先輩、一緒に頑張ったチームメンバーのお陰であると感謝している。

強い小田高の再来を

故郷に戻ってきて、その時の恩返しの意味もあり、OB会の手伝いを始めてから4年経った。現役の試合も、出来る限り応援に参加している。応援は、加藤哲夫大先輩や同期の杉本（6回）、武嶋（3回）、小川（20回）の常連の他に、最近では、卒業したての若手OBの諸君等が来てくれるようになったのは嬉しい限りである。

しかし、現役チームはここ数年（もっと前からか？）苦戦が続きベスト14が最高位である。

現役諸君の負け試合を見ると、相手チームに比べ、上手さでは負けないが、体力気力で負けているように見える。如何にもひ弱である。「常勝湘南」に、体力・気力で立ち向かい、そして勝った過去の小田高が懐かしい。

夏の高校野球、東京都代表に都立城東高校が決定した。キャプテンが「公立も私立もない。強いチームが勝つ」と自信満々発言していた。

同じ高校生同士、さらに心身を鍛練し、強い小田高の再来を切に願うものである。

悔いのないサッカーライフを！

サッカーを始めた動機

寺尾太郎

47～8年前の話で、少々あやふやだが、サッカー部入部の動機を振り返ってみた。

中学で柔道を少し習っていたので、道場にいってみたら、思いっきり投げ飛ばされて（後に原田もそいつに投げ飛ばされた筈）頭に来て、柔道着は全部破り捨ててしまった。

その頃、同クラスの者からラグビーに誘われ直ちに入部した。暫くはラグビーを続けていたが、3年生が卒業すると部員が7～8名になり、廃部となった。

優勝すると午後の授業が

グランドでぼんやりしていたところ同級の杉本錦ちやん（後のキャプテン）がサッカーをやらないかという。県で1、2の強さで、県大会以上で優勝すると午後の授業が休みとかいわれて、直ぐ入部した。

練習は厳しく、夏は太陽が真っ黄色でくっきりまん丸、まぶしくないくらい疲れ果てるまでしごかれた。冬は照明がないのでボールに石灰をつけて（見やすくして）、なるべく頭に受けないようにして猛練習した。お陰で関東では負け知らずで、国体、全国大会に出場することができた。